

女性管理職が語る

最近、学生と話す機会が増え、日本人の環境意識が変わりつつあることを実感しています。「企業が環境に配慮しているかどうかは誰がどう評価しているのか」といった質問を頂くことが多くなりました。

その中で特に記憶に残っているのが、「出荷前に化粧箱に傷やへこみができたら、どう対応しているか」という問いです。というのも、数年前、そうした箱が生じた場合、箱ごと交換の代わりにシール補修で済ます取り組みを時期尚早と見送ったことがあるからです。当時、海外の当社グループですでに始めていたのですが、「日本はまだ消費者の理解が得られる段階ではない」と判断したのです。日本人はパッケージを含めて品質に完璧を求める

持続可能性は豊かな製品から

執行役員
オペレーション
HPサプライチェーン
日本統括本部長

吉田 敦子氏



よしだ・あつこ 横河・ヒューレット・パカード(現日本HP)入社。国際調達などを経て2022年9月サプライチェーンオペレーション統括本部長。23年5月より執行役員。

を提供するには、環境配慮も今後は大切な要素になってきます。メーカーとして最新のスペックやデザインだけでなく、梱包や使用後の環境対策を追求することが必要になるでしょう。

しかし、それは一朝一夕にはできません。その一環で昨年、製品の緩衝材を石油由来の素材から、パルプや段ボールにほぼ変更しましたが、こうした小さな取り組みを積み重ねていく必要があります。サプライチェーン(供給網)部門の統括者として何ができるか、模索を続けたいと思います。環境の大切さを伝えていく努力も欠かせません。先日、当社が高校生向けに実施したSDGsに関する出張授業のアンケートに次のような回答がありました。「自分を含めて大多数の人が環境問題について知らないから、改善が見られないのだと思った」

上の世代に比べて環境意識が高いと思われる高校生でも、環境についてきちんと考えている人は周りにはまだ多くはないようです。このために企業ができることは限られますが、今何が問題で、その解決に向けて企業が何をしているのか、活動の内容と意味を誰にもわかりやすく伝えることが重要だと感じました。豊かな社会を後世に残すため、一企業人として一社人として、できることから始めることが大切です。新型コロナウイルス禍で中断していた子供向けの工場見学を再開する際は、環境対策を学べるイベントをぜひ取り入れたいです。近い将来、箱のシール補修が普通に受け入れられるよう、私自身も行動を起こしていきたいと思えます。

言われてきました。サステナビリティ(持続可能性)に関心がある消費者が増える中、そんな常識も変えなければいけない時期に来ているのかも知れません。グローバルT(情報技術)企業が取り組むサステナビリティの入り口として、私がいつも心にとめて

いるのは「人々の暮らしがより豊かになる製品を世に送り出すこと」です。国連が掲げるSDGs(持続可能な開発目標)の感に加え、精神的な満足感

17の目標の一番目は「貧困の撲滅」です。みんなが貧困を脱して幸せに生活できる世界を実現するために、企業がまずできることの1つが、暮らしを豊かにする製品を多くの方に届けることです。また、暮らしを犠牲にしてサステナビリティに取り組みのでは、そもそも長く続けられません。ただ、消費者が何を豊かと感じるかは時代によって変わります。物質的な満足感に加え、精神的な満足感